

## 令和5年度 奈良市多様な学びの在り方検討会議の意見の概要

開催日時	令和5年12月25日（月）10時30分から12時00分まで
開催場所	Web会議
意見等を求める内容等	居場所づくりについて
参加者	出席者 7人 ・ 事務局 8人
開催形態	公開（傍聴人 0人）
担当課	教育部 教育支援・相談課

### 意見の概要

事務局による概要説明の後、出席者に意見等を求めた。

#### <事務局による概要説明>

既存の取組みを進めてきたが、様々な課題を抱えている。

例えば、公設フリースクールを開室しているが、集団になじみにくく、個別の支援を必要とする児童生徒の数も非常に増えており、個別最適化ニーズなど求められるニーズは保護者を含め多様化している。

また、家庭環境等に起因する教育の枠を超えた効果的な支援体制や学校支援体制の充実についても課題である。

今回検討会議を立ち上げ、学校教育内外の視点や民間で教育に取り組む参加者からの意見を賜り、今の時代やこれからの児童生徒に即した学びへどう繋げていくかの公民連携を含めた今後の事業展開を考えていきたい。

1点目は、大きな視点での居場所の意義、目指すべき空間の在り方、公民の関わりなどについてそれぞれのお立場から考えや事例等をご意見いただきたい。

2点目は、メタバースを活用した居場所づくりとして、手探りな自治体も多い認識。同様の内容についてご意見いただきたい。

#### <出席者の意見>

##### ○奈良市の取り組みやテーマについて

・奈良市が不登校児童生徒だけでなく、長期欠席やそれ以外を含めて、捉えていることは非常に意味があること。

・教員側からは、無気力、不安という回答が多い中、その原因や背景に着目する調査はとても重要。

##### ○新しい学びの場などの居場所の在り方について

・フリースクールの認証など先進事例として長野県で始まるなど、東京でも同様の内容の委員会に入っている。学びの多様化学校の取り組みも300校に増やす方針など、居場所づくりに対し公的な動きが起きていることは素晴らしい。

・一方で、様々な選択肢ができることは大切だが、誰が取り残されるかという観点が重要である。選択肢は増えれば良いと思うが、経済的な負担がある家庭や、それぞれの情報感度によってはアクセスしづらい家庭があることについて、行政としてアウトリーチの視点を持って把握することが必要。

・学校に埋没しがちな、今月誰が不登校であったかなどの情報のデータ連携を行うことも重要。

・某NPOが受託している、行政の教育センターでは不登校児童生徒の6割はアクセスできているが、

その半数以上はNP0からのアウトリーチにより繋がった子たちである。

- ・誰が取り残されているのかの視点を持ちつつ、居場所を増やし、公民が手をつなぐ支援を深め、充実させていく必要がある。

- ・公民が協調できる領域でスクラムを組んでやっていくことが大事。50年変わっていないこの領域のルールをしなやかにいい意味で消していくことが大切。

- ・ギフテッドの子ども達も数多くいる。やりたいことがはっきりしている子どもも多数いるが、それを実践できる場を提供し、メンターサポートを付け支援している。

- ・脆弱性が高い、一番助けるべき子ども達に民間からはなかなかリーチできないが、公が把握しているデータは多いので、公民連携の意義が非常に高いと考える。

- ・選択肢が広がるように学びの場としてオルタナティブスクールを運営してきたが、不登校を起因とした人だけでなく、探求したい気持ちで選択する人が増えてきた。

- ・不登校予備軍も児童生徒全体に対し3割はいるだろうとされている。

- ・多様な学びの議論の際、ターゲットが不登校児童生徒に限ってしまうことが懸念。

- ・30日以上学校に行かない人の中には、不登校児童生徒だけでなく、その他理由とされている人も少なからず存在している。

- ・不登校児童生徒だけ、多様な学びが選択できるのではなく、不登校と認定されなくても、多様な学びの選択ができるようになれば良い。全児童生徒に対してフリースクールなどの多様な学びの場所を選択できるようにしてはどうか。

- ・教育意識の高い家庭では公立学校に1日も行かずオルタナティブスクールを選択する方もいるが、就学義務違反通知を出す自治体もあり、多様な学びの選択として認めれていないケースもある。リーチできている人やできていない人に関わらず、多様な学びへの権利を奈良市で率先して認めてほしい。

- ・国では不登校自体は問題行動ではないとはっきり言っている中で、様々な施策に一貫性がないことに違和感を感じている。学校に行けている子どももその学びに満足していない現状があり、不登校の子だけを支援すればいいということではない。

- ・校門から校舎の間の地域の拠点である施設を活用して、教室に入れない子どもたちの居場所を運営しており、地域の人が見る時間と教員が見る時間を1時間ずつ分けて子どもたちを守っている。そこでは学習支援が目的でなく、社会とのつながりの場や自主的な活動を行っている。

- ・小学6年生くらいから不登校の数が伸びる。心理発達の状態は小学生と中学生で異なるため、それぞれの理解が必要。子ども達自身が自分のことをどう思っているのか、今置かれている状態を理解していくサポートも居場所づくりにつながる。

- ・専門的な視点として保護者に対するアセスメントも役立つと考える。

- ・アンケートにおける教室以外に通えている場所という設問では、保護者より児童のほうが高い数字が出ており、子ども自身は教室以外の場所にちゃんと通えている、所属していると思っている。親は学びの場よりも教科物が大事と考える傾向が強く、奈良市が教科学習以外も全て学びであるということをオーソライズしていくことが良い。所属している事自体が自己肯定感や回復につながっていく可能性がある。

### ○メタバースを活用した居場所づくりについて

- ・某NP0では2021年からメタバースを活用し支援に取り組んでいる。メタバースでできること、できないことが見えてきた。メタバースにつながる子どもたちは限られている。リアルな居場所に接続するにも、アウトリーチが重要であり、居場所を作れば子どもたちがやってくるわけではない。メタバースを作ってどう届けるかを合わせて考える必要がある。

- ・連携している自治体によって目的は変わるが、多くの狙いは既存支援で繋がることのできない子

への居場所としてメタバース支援を行っている。

- ・困難度が高い子どもをメインターゲットに据えているということでもあるため、居場所を提供するだけでなく、スタッフとの1対1の面談機会を持ちメタバースへ誘導する形を取っている。現在面談ができていない子は全体の8割くらい。

- ・一方で、メタバースを利用して色んな人と話したり、学習支援や様々なプログラムに参加できる子の割合は6割程度に下がる。また、毎週参加して楽しく過ごす児童の割合は更に下がる。そのため、困難度の高い子ども達をサポートする目的であれば、メタバースにどう繋げていくかはとても重要。逆に、積極的に学校とは違う学びをしたい子どもたちをターゲットにするのであれば、丁寧な伴走支援はせず、選択肢の周知を行えば、利用者は増えるかもしれない。

- ・メタバースを導入した各自治体では子どもたちの安全管理やオンライン上のルール設計に悩んでいる。リアルな居場所や学校での安全管理とは違う考え方が必要だと感じている。

- ・リアルで地震や不審者等のインシデントが起こった場合などに対応した事前の想定と同様にオンラインでも不審者が入ってこないようなセキュリティ対策や、画面の向こうで子どもが体調崩し、保護者がいない場合などの危機対応フローのようなものをしっかり作っていく。また、人と人との関わりの中で安全性を担保していくために、セーフガーディングの取り組みをスタッフの行動の指針や研修にも取り入れ、保護者へも共有している。こうした啓発自体も大事であり、危機管理の準備ができていない団体はとても多い。

- ・[一般財団法人ロートこどもみらい財団](#)では、自身が発意して帰る場所、戻る場所として児童館のイメージでメタバースをリリース。時間を区切って支援員を配置し、イベントを月5回ほど実施するなど、遊びも前提とした空間を提供。

- ・遊び自体が学びそのものと思っている。ハザードにならないリスクはどんどん取るべき。リスクから学ぶことも大事。

- ・連携しているプラットフォームでは、話に上がった危機対応を元々講じていたこともあり協働した。

- ・メタバースを運営して気づいたこととして、拠点型の教育支援センターなどを運営していたときよりも学校の先生と協力がしやすくなった。いい意味でメタバース空間はどこからでも入ってこれるので、先生も少しの空いた時間で入ってきやすくなった。事例として、5年間不登校だった子どもが、担任の先生との接触をきっかけとして別室登校ができた。不登校において学校ともう一度繋がり直す意味でメタバースが役に立った。

- ・メタバースは大切な取組みと思うが、アンケートでもあった通り、不登校児童生徒の大半がゲームやネットに時間を費やしており、依存度が高くなってしまいう傾向があるため、ネットとどう付き合うのかも大事。奈良市で導入する場合は、デジタルデトックスのような自然体験の取り組みもあってほしいと思う。

- ・外に出られない子どもや人との交流が怖い子どもにとってはきっかけとしてメタバースなどが居場所になる。そこで自己肯定感を取り戻し、繋がりができてくると、リアルの場所を求めるようになる。メタバースはあくまでツールとして活用する認識。

## 〇まとめ

- ・全員一致しているのは、不登校の子どもたちだけでなくあらゆる段階の子どもに対し、誰も取り残されないような多様な支援、多様な居場所があるべきという意見。

- ・全員に対しいきなりリアルの場所を提供するのは現実的に難しい中で、セーフティネットの一つとしてメタバースの場所がある点についても否定的な意見はなかった。

- ・また、丁寧な伴走支援として場のルール設計や危機管理を準備することが重要。